

古代メソポタミアの「宗教」研究をめぐって

渡辺 和子*

A Reexamination of Studies on Ancient Mesopotamian Religion

WATANABE Kazuko

This paper focuses on some conflicting aspects of current studies on Ancient Mesopotamian religion. In my view, the history of the studies on Assyriology (mainly philological studies on cuneiform texts from the Ancient Near East including Mesopotamia) can be divided into three major stages. The first stage (ca. 1850-1950) is characterized by a theological interest in parallels between the Bible and the textual and archaeological remains of Mesopotamia. The second stage (ca. 1950-1985) was intended to be free from a theological perspective and to describe the ancient remains without bias. A. Leo Oppenheim, a leading assyriologist at that time, argued in his book *Ancient Mesopotamia* (1964) that “a Mesopotamian religion should not be written,” because the available material was limited. His claim may also have been based on the fact that the different religious elements like myth, prayer, and incantation are often correlated or mixed in the religious texts. His arguments had held influence until Th. Jacobsen introduced the concept of ‘the sacred’ (first used by Rudolf Otto, *Das Heilige*, 1917) into Assyriology and wrote his book *The Treasures of Darkness. A History of Mesopotamian Religion* (1976). This work seems to have prepared the way for a third stage which continues today. In this stage, especially the religious texts including incantations are intensively studied. It is of note that some encyclopedic dictionaries and introductions not only have adopted the concept of ‘the sacred’ to describe the religion of Ancient Mesopotamia but also have adopted comparative viewpoints in describing religions across regions such as Ancient Egypt, Mesopotamia, Syria, Anatolia, etc. For example, in these cases the correspondent phenomena are all organized under like topics such as deities, myth, offerings, rites, religious personnel, etc. In the field of Religious Studies, scholars are challenged to reconsider the modern concept of religion. Assyriologists as well can benefit from these reevaluations. For example, even the concept of ‘the sacred’ itself is also something which should be examined critically. In this sense, both the argument of Oppenheim and that of Jacobsen have not yet been convincingly settled. Moreover, we must be careful when we use modern languages for discussing ancient religion. Ancient words for certain religious concepts may never be duly replicated in modern languages.

キーワード：宗教、古代メソポタミア、アッシリア学、呪文、祈り

Keywords：religion, Ancient Mesopotamia, Assyriology, incantation, prayer

* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

はじめに

近年の「宗教」概念の再考⁽¹⁾をめぐる議論の中で、宗教史や古代宗教研究と関連するものは決して多くない。それは近代の「宗教」概念の再考が主眼となっているためであり、当然のことである。しかし「宗教」概念の再考と「古代宗教」は無関係であるのではなく、それらの関係を問う難しい課題は今後のものとして残されているといえる。

その課題が難しい理由はさまざまである。「古代宗教」といっても多種多様であり、決して「古代宗教」の一語でくくれないそれぞれの特徴がある。その上、すでに近代において比較的良好に知られていた「古代宗教」もあれば、ようやく近現代になって知られるようになったものもある。「古代メソポタミア宗教」は後者に属する。近代の宗教学者の視野の中にほとんど入らず、現代になってもまだそれほど知られていない、いわば「新しい宗教（情報）」である。ところが「古代メソポタミア宗教」には「最古の宗教」という異名が与えられたりもする。本論ではそのような「古代メソポタミア宗教」の資料を題材としながら、それが現在の「宗教」概念と宗教研究の再考の動きのなかに、どのように位置づけられるかについて若干の考察を試みる。

1. 「古代メソポタミア宗教」は「最古の宗教」か

J. ボテロは『最古の宗教＜古代メソポタミア＞』（1998）の冒頭で「歴史上存在した宗教のなかで、われわれが、確実にしかもかなりの程度明快な知識を得ている最も古い宗教といえ、紀元前四千年紀に始まりキリスト紀元年近くまでの期間存続した、古代メソポタミア宗教にほかならない」という。⁽²⁾「最古」という語は「最新」まで続く時間の連続性を前提とし、それに伴うある種の発展、進化を想定させる。「古代メソポタミア宗教」として扱われる事象の最古期を紀元前4千年紀とするのは文字使用の試みがその時期に始まったとされるからであ

る。それでは人類最古の「宗教」は何かと問うと、すぐさま何をもって「宗教」とするかという難問にぶつかってしまう。

通説では、ティグリス・ユーフラテス河流域に興ったメソポタミア文明⁽³⁾において「最古」の文字が発明され、「最古」の「歴史記述」がなされたといわれている。しかし昨今では文字の発明、あるいは発生についても諸説が出され、どの文字（体系）が最古であるかは判断し難い。紀元前4千年紀中葉から末期にかけて、メソポタミア周辺部（現在のイラン、イラク、シリアに当たる地域）でほぼ同時多発的に粘土板にそれぞれ異なる仕組みをもつ「絵文字」を記す試みがあった。⁽⁴⁾ それらの試みのうち、メソポタミア南部の都市ウルクで使用されたものが整備されて複雑な楔形文字の体系へと発展し、やがてウルクの政治的、経済的な勢力拡大にともなって全オリエント地域に広まっていったと考えられる。⁽⁵⁾

しかし、ほぼ同時期にエジプトでも文字の使用が始められている。メソポタミアでも最初期の文書の数は少なく、内容も乏しいため、実質的な差はほとんどない。また「古代メソポタミア宗教」が存続したと想定される数千年の間には、周辺世界にも、他の地域にもさまざまな「宗教」が並存していたのであり、「古代メソポタミア宗教」の「最古性」を強調することはあまり意味がない。

言うまでもないことであるが、文字の使用と「宗教」の間に必然的な結びつきはない。文字がなかった時代の「宗教」もあれば、現在でも文字をもたない人々の「宗教」がある。文字資料を残さなかった人々もあれば、文字資料がまだ発見されていない場合もある。「古代メソポタミア宗教」の場合も、文字以前の時代の「宗教」との関係、また「口伝伝承」の中の「宗教」との関係も問わなければならない。

古代メソポタミア文明の「宗教」を考える点で、もうひとつの極めて重要な点は、粘土という素材に文字が記されたというメソポタミア特有の事情である。ティグリス・ユーフラテス河

岸の堆積平野に豊富にあった粘土をとって書板とし、それに葦で作ったペンを用いて楔形文字を刻んだ粘土板文書は、水には弱い戦火などによって焼かれると一段と強固になる。何千年経過してもほとんど変わらない状態で発見される例が少なくない。石碑も耐久性はあるが、風化したり焼失することもある。しかし石材は高価でありもとより数が少ない。羊皮紙やパピルスよりもはるかに優れた耐久性をもつ粘土板文書も焼かれていないものは水に浸かるなどして大量に失われたことであろう。それでも数量が多く、これまでに出土している粘土板文書よりも、今後発見される粘土板文書のほうが多いことが容易に想定できる。

メソポタミア北部のアッシリアでは紀元前9世紀以降、その版図の拡大にともなって、アッカド語とアラム語の二ヶ国語で公的記録がとられるようになった。当時のレリーフや壁画にもしばしば表現されているが、書記は二人一組で仕事をし、一人は粘土板にアッカド語(楔形文字)を刻み、もう一人は羊皮紙(巻物)にインクでアラム語(ヘブライ語に類似)を書いた。⁽⁶⁾しかし当時の羊皮紙は一点たりとも発見されていない。文字が書かれていたというだけでは、文書資料が出土する条件とはならない。メソポタミアでは記録が粘土板になされたからこそ、今日まで残り、また今後も出土し続ける。また、当時のメソポタミア社会が特に記録や記述を重視していたことも、⁽⁷⁾大量の粘土板文書が作成された理由である。

近現代の発掘調査をとおしてこれまでに出土した粘土板文書は数十万点にのぼり、各地の博物館に収められているが、それらの多くはいまだに公刊されていない。これまでのペースではすべての公刊にあと三百年ほどかかるといわれている。そして、それをはるかにしのぐ量の粘土板文書が地中であって現在も新発見が続いている。また粘土板文書が出土する地域はメソポタミアだけにとどまることなく、シリア、パレスティナ、小アジア(アナトリア)、エジプト、イランなどの周辺世界に及ぶ。そして粘土板文

書の内容も多岐にわたっている。

このような特質から強調すべきことは、「古代メソポタミア宗教」は「最古の宗教」の局面をもちながら近年になって知られるようになったという意味で「新しい宗教情報」であり、また将来においてより多く知られるようになるという意味で「未来の宗教情報」であるということである。

2. 「宗教」・「古代宗教」・「宗教学」

深澤によれば「近代宗教研究に特徴的な宗教概念」は、「宗教が、社会総体から切り離して主題化しうる通文化的な何ものであること、宗教が他の文化現象とは根本的に異なる固有性をもつこと、宗教が現に構築されつつある近代性の前や外に本質を持つこと、宗教が固有の歴史(「一般／個別宗教史」)をもつこと、宗教が未決定な未来を、また近代性を補完するポテンシャルをもつこと、などを内容としていた」⁽⁸⁾とのことである。

「宗教」概念が成立し、そして「古代宗教」の概念も派生したと考えられる。関一敏は、近代の「宗教」概念の成立によって、自らは「宗教」の自覚がないのに「そう名づけられ、自覚をしいられたもののなかで、もっとも当惑してきたのは、おそらく部族宗教とか民間信仰とよばれた生活世界でしたが、そこにあらわれた学術上の命名が、フェティシズム、トーテミズム、アニミズム、マナイズムというように異教群とおなじ『イズム』であったことは、今からふりかえれば、むしろそこに西欧精神史を読み解くことのできる歴史的痕跡でもありました」と述べている。⁽⁹⁾古代人の場合も、もちろん「宗教」という自覚はなかったわけであるが、ではどのような自覚があったのかを解明することはどのようにして可能になるのであろうか。

他方、改めて「古代」とは何かについて論じること容易ではない。「古代」を問い直すことは、必然的に歴史観を問い直すことになる。しかしこのように大きな問い直しは将来の課題とせざるを得ない。現代日本において宗教につ

いて全般的に論じる『岩波講座 宗教』全十巻⁽¹⁰⁾が2003年の終わりから2004年にかけて出版された。このなかに古代や歴史観に言及する論考はほとんど含まれていないが、第3巻『宗教史の可能性』の序文の中で島藺進が、ヤスパースの「軸の時代」（人類進化の転換点となった紀元前800-200年）の概念に触れ、『『近代』の問い直しが人気を集める昨今だが、少なくとも宗教については、『軸の文明』の問い直しも並行して進められなくてはならない』と述べていることを指摘しておきたい。⁽¹¹⁾

歴史観の問い直しにはまだ時間がかかることであろう。近代宗教学の問い直しにおいても、「古代」理解の検討は必要であると思われる。また近代宗教学における「古代宗教」の位置づけについても改めて問われるべきであろう。19世紀から20世紀初頭にかけて、近代宗教学の礎を築いたマックス・ミュラー（1823-1900年）、ジェイムズ・フレイザー（1854-1941年）、ルドルフ・オットー（1869-1937年）らの学説の再検討のためには、彼らの視野にどのような「古代宗教」がどの程度入っていたのか、入っていなかったのか、あるいはまた入れられなかったのかなどについて問い直すことも必要であると思われる。ただし彼らの「古代宗教」理解が妥当であったかどうかはまた別の問題である。当時のヨーロッパにおいて古代のギリシャ、ローマ、イスラエル、インドの「宗教」については比較的よく知られていた。しかし「古代エジプト宗教」については19世紀前半に聖刻文字（ヒエログリフ）が解読されて、⁽¹²⁾ また「古代メソポタミア宗教」については19世紀半ばに楔形文字が解読されて、⁽¹³⁾ ようやく研究対象になり始めたばかりであった。ただし文字解読以前からエジプト文明は、メソポタミア文明よりもはるかに多く、また長くヨーロッパ人に知られていた。その理由としては、かつてエジプトが古代ローマ帝国の支配下にあったこと、またその記念碑的建造物がヨーロッパ人の関心を集めていたことなどが挙げられる。⁽¹⁴⁾

3. アッシリア学

現在、古代メソポタミアに関する研究を大別するならば、考古学と、考古学調査によって出土する文書を研究する文献学（主にアッシリア学）の二つになる。その後は、周辺世界からもさまざまな粘土板文書が出土するようになったため「アッシリア学」の対象は著しく広げられることとなった。

「アッシリア学」（Assyriology）とは実質的には楔形文字文献研究であるが、その発生時には関連する考古学も含まれていたため、今日でも完全には分離されていない。「アッシリア学」の語は日本ではなじみが薄いのが、国際的には古代メソポタミアを含む広い範囲に及ぶ包括的な学問分野となっている。毎年開催される「国際アッシリア学会」（Rencontre Assyriologique Internationale; 2008年には第54回目の会合が開催される）では、楔形文字を使って書かれた言語（シュメール語、アッカド語、ヒッタイト語、エラム語、ウラルトゥ語、ウガリット語、古代ベルシャ語など）とその文書の研究者と、関連する考古学研究者が発表を行っている。このように多彩な内容をもつ分野が「アッシリア学」と呼ばれていることは確かに不自然である。アッシリアというのはメソポタミア北部に栄えた国の名前であるが、特に19世紀にアッシリアの首都の一つであったニネヴェから宮殿、城壁のほか大量の粘土板文書が発見されたため、この分野が「アッシリア学」（Assyriology）と呼ばれるようになり、定着した。⁽¹⁵⁾

ところが日本に「アッシリア学」の名称は定着していない。日本では1954年に「日本オリエント学会」が設立されたこともあり、「オリエント学」という包括的な分野名が使われることが多い。そしてさらに、それぞれの研究者の専門領域によって「エジプト学」、「シュメール学」、「ヒッタイト学」などに細分化される。しかし「アッシリア学」の中心に位置しているはずのメソポタミアのアッカド語文献を扱う分野に対応する日本語名称ははっきりしない。「バビロニア学」の語は欧米でも日本でも使われて

いない。それに対して「アッシリア学」というと日本では、アッシリアを専門領域とする狭義の「アッシリア学」と受け取られてしまう場合もある。

メソポタミアの地理と歴史を概括すると、紀元前3千年紀にはメソポタミア南部にシュメール語を話すシュメール人の、アッカド語を話すアッカド人の都市国家群があった。紀元前2千年紀から紀元前1千年紀前半には、メソポタミア南部にアッカド語の一方言（バビロニア語）を話すバビロニア人（民族的にはアムル人といわれる）の政権があった。ただし紀元前2千年紀後半には系統不明のカッシート人がバビロニアを支配し、北部では同じくアッカド語の一方言（アッシリア語）を話すアッシリア人の国があった。このように広範な領域を覆う研究分野を改めて「アッシリア学」の名で呼ぶことを日本で提唱するべきではないであろう。しかし「オリент学」も定着しているとはいえ、「反省」を要する名称である。新しい名称として「メソポタミア学」を導入することも一案であろう。

4. アッシリア学における「宗教」研究

ヨーロッパでのアッシリア学発生時から「宗教」がどのように扱われてきたかを瞥見しておきたい。現段階でアッシリア学の歴史をたどること、少なくともその宗教に対する取り組みについて振り返ることはいささか時期尚早であるが、大きく三つの時期に分ける試案の概略を示す。

4.1. <第一期> 1850-1950年ころ

ここで1850-1950年の百年間を第一期とするのは、あまりにも概括的であるが、メソポタミア宗教への関心が主に『旧約聖書』の記事に発していたことを特徴とする時期と考えたい。すでに19世紀初頭からメソポタミアの地を訪れた者による、「学術的」紀行文が出版されていた。⁽¹⁶⁾ また楔形文字解読の試みも開始された。その第一歩はすでに知られていたベルシャ語を

手がかりとして、楔形文字で書かれた古代ベルシャ語と対訳のアッカド語を読み解くことであった。⁽¹⁷⁾

<第一期>は大量のアッカド語文書の発見と、アッカド語の解読終了によって始まる。フランスのP. E. ボッタが、紀元前8世紀にアッシリアの都のひとつであったコルサバード（古代のドゥル・シャルキン）を発見し、その遺物を1847年にルーブル美術館で展示した。ボッタの発掘報告書は1849年に『ニネヴェ遺跡』(Monument de Ninive) と題されて出版された。ちなみにこの題名はボッタがドゥル・シャルキンをニネヴェと間違えて発掘したことによる。同じころイギリス隊によって真のニネヴェも発掘され、Sir A. H. レイヤードによる発掘報告書(The Monuments of Niniveh, 1849) が公刊された。⁽¹⁸⁾ 特にニネヴェからはアッシリア王アッシュルバニパル（在位紀元前668-627年）のいわゆる「図書館」が発見されたことにより、数万点の粘土板文書と断片が大英博物館に収められることになった。

同じ19世紀半ばには、表意文字と表音文字の複雑なシステム（おそらく「万葉仮名」に似ているのであろう）によって書かれるアッカド語の解読がほぼ完了した。そして特に大英博物館のジョージ・スミスが1872年に「ノアの洪水」(『創世記』6-9章) に類似する「洪水神話」を『ギルガメシュ叙事詩』第十一書板にの文中に発見したことにより、考古学を含めた「アッシリア学」は『聖書』記事の「史実性」を証明することにますます没頭していった。たとえばL. ウーリーはメソポタミア南部の発掘において「大洪水による破壊層」を発見したと報告している。⁽¹⁹⁾

このようにフランスとイギリスでは、メソポタミアの瞠目すべき発見物が本国の博物館に展示されたことによって、改めて『聖書』の史実性をめぐって論議が盛り上がった。この分野では遅れをとっていたドイツも1900年ころから「アッシリア学」に参入し、「汎バビロニア主義」と呼ばれる「アンティ・セミティズム」の性格

をもつ一連の研究活動を盛んに行った。⁽²⁰⁾ このほか<第一期>については「死んでよみがえる神」をめぐる論議とその波及、「<神話と儀礼>学派」など、「宗教」に関連して論じるべき事柄が数多くあるが、本稿の目的からはそのため別の機会に譲る。⁽²¹⁾

4.2. <第二期> 1950-1985年

<第二期>は、<第一期>の反省に基づいた時期といえる。その傾向を端的に示しているのがA. L. オッペンハイム（1904-1974年）による概説書『古代メソポタミア』（1964年）である。オッペンハイムは、1938年にオーストリアからフランスへ、1941年にアメリカ合衆国へ迎えられ、1947年からはシカゴ大学で『シカゴ・アッシリア語辞書』（CAD、1956年に刊行が開始され、現在終盤を迎えている）の編纂の責任者となった。⁽²²⁾ オッペンハイムは当時のアッシリア学全般に通曉し、その包括的な概説書も現在まで広く読まれている。しかしこの本のなかでの「宗教」についての章には「なぜ『メソポタミア宗教』は書かれるべきではないのか」⁽²³⁾という衝撃的な表題がつけられている。彼は「メソポタミア宗教の体系的な叙述は不可能である」というが、その理由は主として入手可能な資料の不完全さである。発掘によって出土するのは建築遺構だけであり、儀礼についても比較的少ない文書から窺い知ることができるだけである。そして図像の意味も一義的でない。

「メソポタミア宗教」の体系的叙述が難しいことは、メソポタミア研究者であれば誰もが了解できるのであり、彼が挙げている理由の多くは今日でもそのまま認められている。しかしオッペンハイムは「宗教」について、それは「複雑にからみあう」としながらも、「宗教についての文書」のなかには「祈り」（prayers）、「神話」（mythological texts）、「儀礼文書」（ritual texts）の三つのタイプがあるという。さらにそこで「メソポタミアの宗教的実践における祈りは常に付随する儀礼と結びつけられている」⁽²⁴⁾と付言している。

オッペンハイムが「メソポタミア宗教」の叙述に強い疑念を表明したのは、資料の不完全さとともに、彼自身が異なる範疇に属すると考えるものが実際の文書のなかでは分かちがたく結びついていることが決定的であったのではない。オッペンハイムにとっては、たとえば神への祈りの言葉と、こまごまとした「儀礼」手順の諸規定は相容れないものだったと考えられる。オッペンハイムの中の「宗教」概念がどのようなものであり、どのように形成されたのかをたどることは困難であるが、少なくとも宗教をめぐる近代の諸概念をメソポタミアの事例に適用することを試みて行き詰ったとみることができるであろう。

オッペンハイムの発言のためだけではないが、この時期に「メソポタミア宗教」の研究は慎重になった。考古学も文献学も、今ふりかえれば<牽強付会>とも言うべき論述を脱して「記述」に徹しようとしたことは、結果的には必要なことであったといえる。多くの発掘報告書が書かれ、盛んに新文書が公刊されていった。

そして1976年に注目すべきTh. ジェイコブセンによる『闇の財宝—メソポタミア宗教の歴史—』が出版された。彼はルドルフ・オットーの『聖なるもの』（1917年）に従って、宗教の基本を「人間が超自然力を畏怖し、忠誠であることで、安全・救済を求めるもの」とし、さらにメソポタミア宗教を千年単位で区切って発展的宗教史観によって説明した。⁽²⁵⁾ この書によって、アッシリア学のなかにオットーの「聖なるもの」が<決定的に>持ち込まれたといえるであろう。『聖なるもの』の出版からすでに60年ほど経過していたのであるが、アッシリア学界においては、ジェイコブセン自身の宗教史理論よりも、オットーの「聖なるもの」の導入のほうがより広く影響を与えたといえる。それによって次の<第三期>の幕開けが準備されたと考えられる。しかしながら、オッペンハイムの「メソポタミア宗教」に関する発言の評価もジェイコブセンの学説の評価もまだ今後の課題として残されている。この点については、また後

で述べる。

4.3. <第三期> 1985年以降

1985年ころから始まって現在も続いていると筆者が感知しているところの<第三期>では急速に「宗教（文書）」への関心が高まっている。<第三期>は現在も進行中であるため仮の評価しかできないが、いくつかの傾向を指摘することができる。

4.3.1. 「宗教文書」研究の隆盛

<第三期>の第二の傾向として、「宗教文書」とされてきたものの個別研究、編纂、出版が盛んになっていることを挙げることができる。粘土板文書を読む人が少ないため、百年ほど前に手写されたものしか出版されていない、あるいは全く出版されていない「宗教文書」も少なくない。現代の知見を踏まえた信頼できる手写と編纂の努力が「宗教文書」にも費やされるようになった。早い時期から知られていた神話や儀礼に関する文書についても、次々と原文とその校訂に基づいた改訳と研究が出版されている。⁽²⁶⁾特に「呪術」や「呪文」に分類される文書に関心が集まるようになったことは重要である。⁽²⁷⁾それは、<第一期>の研究者の間にはキリスト教神学的関心が強かったため、「異教的風習」とされた「呪術」に関する文書の研究が大きく遅れていたことにもよる。

4.3.2. 概説と事典項目

第一の傾向としては、「古代近東文明」あるいは「古代世界の宗教」についての大規模な概説書が編まれ、エジプト、イスラエル、シリア、アナトリアなど並んでメソポタミアも論じられるようになったことが挙げられる。代表的な例は、1995年にJ. M. サッソンが編纂した『古代近東の諸文明』全四巻であり、その時点におけるこの分野の集大成ともいえるものである。そのなかで「宗教と科学」(III, Part 8)に修められた論文のうち、「メソポタミア宗教」に関連するものとしては「シュメールとアッカドにお

ける神話と神話作り」(W. G. Lambert)、「古代メソポタミアの宗教的図像表現」(A. Green)、「古代メソポタミアの神学、祭司、礼拝」(F. A. M. Wiggermann)、「シュメールとアッカドにおける哀歌と祈祷文」(W. W. Hallo)、「古代メソポタミア思想における死と死後生」(Jo Ann Scurlock)、「古代メソポタミアにおける魔術、呪術、卜占」(W. Farber)がある。⁽²⁸⁾

一つの新しい概説書および概説書を兼ねた事典のあり方を示しているのが、サラ・I. ジョンストン編『古代世界の諸宗教』(2004年)である。⁽²⁹⁾古代近東と地中海世界の宗教を扱うが、総論として各地域の歴史のほかに、地域横断的に論じられる「一神教と多神教」(J. Assmann)、「神話」(F. Graf)、「宇宙論」(J. J. Collins)、「穢れ、罪、贖罪、救済」(H. W. Attridge)、「秘儀」(S. I. Johnston)、「接触する諸宗教」(J. Scheid)、「呪術」(S. I. Johnston)などのテーマが並べられている。そのあとで<キー・トピック>として「聖なる時間と空間」、「宗教的職能者」、「犠牲、供物、奉納物」、「祈り、賛歌、呪文、呪い」、「占いと預言」、「神々と霊的存在」、「個人と家族の宗教的実践」、「死と死後生、最期のこと」、「神学、神義論、哲学」、「神話と聖なる物語」、「秘伝と神秘主義」など二十のトピックが挙げられ、それぞれに(地域の異同が少しあるが)エジプト、メソポタミア、イスラエル、シリア、カナン、イラン、ギリシャ、ローマなどの地域について専門家が執筆している。これまでも古代オリエント世界についての概説書ではある事柄についてエジプト、メソポタミア、アナトリア、シリア、カナンなどの地域に関しての論述が並列的に集められてきたが、⁽³⁰⁾これほど細文化されたトピックでの「地域横断的論述」は初めてであろう。

日本でも同じ2004年に似たような試みがなされた。それは日本の「古代オリエント学」の一応の集大成とみなし得る『古代オリエント事典』(日本オリエント学会編)である。編者の弁によれば「これまでの地域と領域を限定した通時的な概説書では軽視されてきた比較文化的

観点を重視し、民族や歴史のみならず、社会と経済、女性や生活、技術と工芸、文学や美術など、古代オリエント文明のあらゆる領域を視野に入れた事典を目指す必要があった」とのことである。⁽³¹⁾ そのようなテーマを地域横断的に扱う「大項目」が総論として置かれ、さらに多くの「小項目」が従来の事典項目のように並べられた。この事典は全般的なものであり、「宗教」は「大項目」の一つ「宗教と科学」のなかで扱われるため規模は小さい。筆者はこの項目の構成を担当したが、冒頭で「宗教」と「科学」の語とその用法は再考を要するが、それらに代わる適切な語がないため注意深く使うほかはないと述べ、その再考の基盤のためにも具体的な事象を比較の可能性を探りながら並べるという方針をとった。「宗教」の構成としては地域別（メソポタミア、アナトリア、ウガリト、イスラエル、エジプト、アケメネス朝時代以降の西アジア）にしてそれぞれの専門家に執筆を依頼したが（メソポタミアは筆者が担当）、小見出しをほぼ統一して「神々」、「儀礼」、「宗教的世界観」、「宗教的職能者」とした。⁽³²⁾ これはいわば学際的な取り組みであったが、専門領域の違いによって語彙の違い、概念の違いに新たに気づくこともできた。しかしどのような比較検討が可能であり、どのような課題があるかさらに探求する必要があると感じている。

アッシリア学領域での金字塔の一つである百科事典*Reallexikon der Assyriologie*（1932-）の刊行が、開始から七十五年経つ現在もまだ続いている。2007年に刊行された第11巻の分冊のなかに「宗教」（“Religion”）の項目が含まれている。⁽³³⁾ メソポタミアの「宗教」を担当するA. ツゴルは「宗教」を「人間とそれを超える何かとの間の関係システム」とし、メソポタミアにおいてそれらは多様な「宗教的実践」の中に表現され、また文書に「宗教的現象」の理論的考察が見られるとする。原語（シュメール語とアッカド語）には「宗教」に当たる語はないが、「清い、光彩を放つ」（シュメール語の *kù.g*, アッカド語の *ellu*）という語が「聖なる」

（“heilig”）とも重なるとする。また「聖なるもの」（“das Heilige”）は隔離された空間（神殿）、時間（祭り）、人（祭司）、そして経過（儀礼）にあるという。そして「ヌミノーゼなもの」、人、経過には「まばゆいオーラ」（シュメール語の *me-lim₄*、アッカド語の *melemmu*）があるとされる。⁽³⁴⁾

まとめると、＜第一期＞には研究自体がキリスト教神学の関心を帯びていたが、＜第二期＞ではそれが反省され、先入見を排して「記述」に向かおうとした。またオッペンハイムが「メソポタミア宗教」の叙述は不可能と主張する一方で、ジェイコブセンが「メソポタミア宗教」にR.オットーの「聖なるもの」を導入して叙述可能とする方向も示した。そして＜第三期＞には、それまで等閑に付されてきた大量の「宗教文書」の研究が行われるようになり、また他の「古代宗教」との比較も行われるようになった。しかしオッペンハイムの問題提起にはまだ答えが出されていない。また「聖なるもの」の概念も再考の対象とすべきものである。これらの問題が十分に自覚されていないために、現在のアッシリア学は方法論的にやっかいな問題を抱え込んでしまっている。

5. 宗教学とアッシリア学

ここで、アッシリア学を宗教学との関係という観点から考察してみたい。アッシリア学も宗教学も19世紀後半になって成立したのであり、両者を組み合わせる試みはまだわずかである。またこれらの両分野に限られたことではないが、一方の理論を他方の研究に使う場合にはある種の時間差が生じる。そしてこのことがさらに複雑な問題を生んで行く。

アッシリア学の徒は長年にわたって文献学的訓練を受けたのち、出土する粘土板文書を、その言語や内容の別によらず一通りは判別でき、また楔形文字を書き写すという作業ができなければならない。しかし文書の年代や地域によって楔形文字の書体と文法だけでなく、言語まで

もが異なるため、一学徒がどんなに研鑽を積んでもすべて読解できるようにはならない。さらに文書の内容は政治、法、経済、歴史、文学、医学、薬学、数学、語彙のリストなど多様であるため、実際には一つのジャンルを、またはある時代のある地域の文書を深く読み込むために分業することになる。しかし慣例として「宗教文書」に分類される文書だけを読んでいても理解が進むわけではない。法的文書のなかにも誓約があったり、一つの人名であっても神への祈りのことばであったりするため、「宗教」に関連しない文書はないともいえる。

前述したように、＜第二期＞ではオープンハイムによって「メソポタミア宗教」の論述放棄が提案されたにもかかわらず、＜第三期＞に「宗教文書」研究の隆盛を迎えたことについてもう一度考えてみたい。

宗教学的関心からI. P. クリアーノは1991年の著書 (*Out of this World*) のなかで「メソポタミア宗教」にふれ、次のように述べている。

紀元前3500年からのシュメール語文書を使うことができる。それは色あせた幾千年紀の闇に沈んだ過去の財宝の理解を助けてくれるのだろうか。もしわたしたちが、「なぜ＜メソポタミア宗教＞は書かれるべきではないか」についていくつかの理由を挙げた有名なアッシリア学者A. レオ・オープンハイムを信じるならば答えは「ノー」である。しかしTh. ジェイコブセンによって書かれた『闇の財宝』のすばらしい復元を信頼するならば「イエス」である。われわれの研究の目的のためには、答えは明らかに「イエス」である。シュメール人は他界への旅の最古の記録を生み出したが、(中略) この話の筋に現代人もおおむねついてゆくことができる。⁽³⁵⁾

クリアーノがオープンハイムの著作もジェイコブセンの著作も知りながら、後者の論述をより魅力的であると思うのは無理のないことであ

る。ではアッシリア学の領域ではどうであろうか。筆者の知る限り、オープンハイムとジェイコブセンの論議をすり合わせて検討した論考はまだない。＜第三期＞のアッシリア学者たちは、先に見たように「宗教」について論じるときに、オープンハイムの警告に対して答えることなく、ジェイコブセンが導入した「聖なるもの」、あるいは「ヌミノーゼなもの」⁽³⁶⁾ を暗黙のうちに前提して、すでに「宗教」を論じる基盤があるかのように考えているようである。いずれにしても、その基盤について論じることはまだ始められていない。

このような傾向は日本にも輸入されている。アッシリア学者（より狭くいえばシュメール学者）の前田徹（2003）もジェイコブセンに従ってオットーの「聖なるもの」の概念を、古代メソポタミア宗教の理解のために採用している。⁽³⁷⁾ このこと自体は誤りとはいえない。しかし取るべき手順としては次のように考えられる。まず現代の宗教学者が近代の宗教学を再考し、⁽³⁸⁾ その結果を現代のアッシリア学者が、近代の宗教学者が知らなかった古代メソポタミア宗教研究に生かしてゆく方策を探ると同時に、これまでの古代メソポタミア宗教研究の不適切な方法を是正してゆくことが期待される。しかしその実践は難しく、時間もかかる。

現代のアッシリア学者のほとんどは宗教学者ではなく、「近代宗教学」を問い直す関心も時間もない。前述したように現在の＜第三期＞では幸いにして、アッシリア学界にはある種の「宗教（学）ブーム」があると思われるほど、宗教的な内容をもつ文書の研究が盛んになっている。今後は「宗教学」への関心も高まって「アッシリア学」と「宗教学」との協働もこれまで以上に目に見える結果を生むことも期待できる。経歴の上で「宗教学」と「アッシリア学」の双方を修めた者は、筆者が知る限りでは日本で宗教学を学んだ後に留学してアッシリア学を修めた何人かの日本人であり、おそらく後藤光一郎⁽³⁹⁾ が最初であろう。幸か不幸か、両分野の重なる部分に身をおく研究者としては、任の

重さと難しさにたじろぐことなく、挑戦する勇氣をもたなければならない。

6. 「祈祷／祈り」と「呪文」に関する問題点

先に述べたように、オッペンハイムの場合は「祈祷」と「儀礼」などの概念区別をしていたことが「メソポタミア宗教」の叙述に警告を発する大きな要因であったと考えられる。しかし、大量に出土する「宗教文書」を前にしていささか苦し紛れの観があるが、「祈祷」と「呪文」が混交しているような文言が含まれる一連の文書を近代アッシリア学の祖であるベノ・ランツベルガー（1890－1968年）が「祈祷呪文」（“Gebetsbeschwörung”）と名づけ、現在までそのように呼ばれている。⁽⁴⁰⁾ 日本には「呪術」と略す研究者もある。⁽⁴¹⁾ 現代語に同等のもの、適切な訳語がない限り、このような造語はやむを得ないことなのであろう。しかしその場合も、本来は異なるものが組み合わされているという意味合いは残る。

われわれはオッペンハイムの立場に戻るのではなく、彼が発した警告をもう一度吟味して、それに対する何らかの答えを出して先に進むことが現在「メソポタミア」と「宗教」の両方にかかわる者に求められているのではないだろうか。オットーの「聖なるもの」を導入するだけで「メソポタミア宗教」の問題が解決するわけではない。

J. G. フレイザーは『金枝篇』のなかで、「宗教」と「呪術」（共感呪術）を峻別した。そして「祈祷」はフレイザーのいう「宗教」に属している。しかし彼自身、「宗教」と「呪術」が混交することがあると認め、次のように述べている。

われわれが検討した呪術のある事例では、その中に精霊の働きが取り入れられており、祈祷と供犠によってその好意をむかえる企てのなされているものが見られた。しかしこのような例は、全体として見るときはむしろ例外的なものである。宗教によっ

て着色され、それと交錯した呪術を示しているのである。共感呪術が純粹無雑な形をとって現れている場合には（Wherever sympathetic magic occurs in its pure unadulterated form）、それは必ず自然界のひとつの現象がどんな霊的または人格的能作者の干渉を受けることもなく、必然的にそして不可避免的に他の現象の結果として現れることを予想している。すなわち、その基礎的概念は、近代科学のそれと一致するのである。⁽⁴²⁾

6.1. 「祈祷呪文」を含む文書

古代メソポタミアの文書の中で、何を「祈り」と訳し、何を「呪文」とみなすべきかは、初めから決まっているわけではない。また一つひとつの語についても訳語を決めるためには、できる限り多くの用例を集めて意味をいくつかに絞る。この作業は辞書に記載してゆくという作業が必要であり、今日まで約百五十年、すなわちアッシリア学の黎明期から休まず続けられてきている。現在基準となるアッカド語の二種類の辞書としては、アッカド語・ドイツ語⁽⁴³⁾と、アッカド語・英語⁽⁴⁴⁾のものがある。シュメール語辞書については、まだ完全といえるものはない。どんな翻訳作業においても完全に意味が重なるという訳語を見つけることは容易ではないが、一方が「死語」であればなおのことである。

アッカド語の「祈祷呪文」文書のなかに、辞書では「呪文」（“incantation,” “Beschwörung”）とされる語が用いられている。アッカド語で「シプトゥ」（*šiptu*）と発音されるが、常にシュメール語でENと書かれる。日本語の単語が漢字で書かれる場合と似ている。

次に例として紹介する「祈祷呪文」文書は「ナンプルビ」と呼ばれるものの一つでいわば「厄除け」を目的とする。「予兆占い」によって「不吉」と判断されることがあると、それを宗教的職能者（たいていは「アーシプ」と呼ばれる）に依頼して、その予兆をふり払ってもらう。

「アーシプ」はあらゆる不吉な事象に対抗する「儀礼文書」に通じ、それぞれの文書の指示に従って、人々から望まれる一連の儀礼を行っていたようである。

6.2. 文書例：「山猫に関する不吉な予兆をはらうナンブルビ」⁽⁴⁵⁾

- 1-3 人家で常に鳴き、うめき、また繰り返し・・・・する山猫の「災厄に対して」。その災厄がその人家に近づくことがないように、それを過ぎ去らせるために。
-----（粘土板文書に引かれた線。「段落」を示す。）
- 4 その「儀礼」（KID.KID.BI）。夜に聖水の壺を置く。
- 5 あなたはそのなかにタマリスク、*maštakal* 草、石灰、アスファルト、エンドウ豆（*hallūru*）と *kakkū* 豆を投げ入れる。
- 6 そしてそれ（聖水の壺）を星の下に置く。あなたは山猫の像を粘土で作る。
- 7 それに石灰と墨で色をつける。
- 8 あなたはエアとマルドゥクのために二つの携帯用祭壇を設置する。
- 9 あなたはそこに一組十二個のパン三組（異本では四組）を置く。ナツメヤシ（と）
- 10 上等の小麦（*sasqu*）を撒く。シロップ（をかけた）*mirsu*（と）純乳脂肪を置く。
- 11 献酒容器を置く。杯（*šāhu*）を
- 12 ビールで満たして置く。杜松を入れた香炉を置く。
- 13 こうして用意した祭壇の向こうに庭の（薬）草を投げる。あなたは当該の人（山猫の災厄に苦しむ人）をそこに立たせる。そして
- 14 彼は山猫の像を高く掲げて次のように言う。

- 15 「〔呪文〕（ÉN）」：エアとマルドゥク、慈愛に満ちた神々、

- 16 拘束されている者を解き放ち、弱っている者を助け起こす（神々）、
- 17 人間を愛する（神々であります）
- 18 エアとマルドゥクよ、この日に
- 19 私の事例のために私のところに来てください。そして
- 20 私の事例に裁定を下し、私について決定をしてください。
- 21-22 私の家で鳴き、うめくこの山猫によってもたらされる災厄は
- 23-24 —それが私の神に対する過ちのゆえであれ、私の女神に対する過ちのゆえであれ—私を昼も夜もおののかせます
- 25 [エアと] マルドゥクよ、卓越した神々よ、
- 26-27 [私の家に繰り返し現われる] 不幸を招く[力(?)と予]兆[によるこの災厄を] 私から去らせてください。
- 28 [それが] 私に[近づき] ませんように、入ってきませんように。
- 29 [こちらに来ませんように、] わたしを捕まえませんように。
- 30 [それが川を渡り、] 山を越えて行きますように。
- 31 [三千六百ベール] 私の体[から遠ざかりますように。]
- 32 [煙のように] 空に向かって[いって] しまいますように。
- 33 [(一度) 根掘ぎにされたタマリスクのように] もとの場所にもどれませんように。

- 34 彼は[これをエアとマルドゥクの前で] 言う。そして
- 35 彼は[山猫(の像)] を地に置く。そして
- 36 あなたは[香炉とたい] まつを彼に向かって振る。
- 37 あなたは彼を[聖] 水によって清める。その人を
- 38 あなたは跪かせる。そして彼は心を抑圧

- しているすべてのことをいう。
- 39 あなたはその山猫（の像）を川のなかに
投げ入れる。そして
- 40 彼は後ろを振り返ってはならない。彼は
通ってきた道を（再び通って帰って）い
ってはならない。
- 41 彼はまっすぐに家に帰る。そうすれば
- 42 彼が生きている間、（その）災厄が彼に
近づくことはない。

Fz. 人の家で畸形が、牛の群れの中であれ、
小家畜のなかであれ。

Kol.A 蠟の書板に書かれた原文から書写し
た。「呪術師」シャマシュ・イブニの息
子である「呪術師」キツイル・ナブーの
書板。

注釈

- 4: KÌD.KÌD.BI 「その諸行為」、「それに対
して行うこと」。「その儀礼」と従来訳
されてきた。表意文字としてのシュメ
ール語（シュメログラム）で表記され
ている。
- 5: 「あなた」とはアーシプ (*āšipu*) とよば
れる職能者を指す。辞書では「呪術師、
悪魔払い師」(“exorcist,” CAD A2
431a) とされる。
- 8: エアとマルドゥク：エアは知恵の神、
マルドゥクはバビロンの守護神。ここ
ではエアとマルドゥクは、太陽神シャ
マシュとならんで「呪術」のなかで頻
繁に呼び出される神々。
- 15: ÉN (= *šiptu*) は辞書では「呪文」
(“incantation, spell,” CAD Š3 86)。
- 31: 一ペールは人が二時間かけて歩く距離。
- Fz: ドイツ語の “Fangzeile” のこと。後続
する書板の最初の行の言葉が記されて
いる。

Kol.A: テクストAの「コロフォン（奥付）」。

これまで「呪文」と訳されてきたÉN、アッ
カド語では *šiptu* (15行目) のあとには神々に

呼びかける「祈り」が続く。ÉNとはおそらく
「決められている（神への）唱えごと、口に出
して言うこと」のような意味であろう。その内
容は神々に呼びかける一人称の「祈り」となっ
ている。「口に出して唱える」こと自体、行為
のひとつでもある。そして「呪術師」が専門家
として行うべき諸行為 (KÌD.KÌ.BI) の規定が
あり、「儀礼（文書）」の部分と解されてきた。
「メソポタミア宗教」に限らず、すべての「宗
教的実践」は複合的なものであり、その複合性を
どのようにとらえるべきかという問題になるで
あろう。

7. 展望

上記の文書は一例に過ぎないが、ここでオッ
ペンハイムのように「メソポタミア宗教」をと
らえることを放棄するべきではないとしたら、
どのような道を進むべきであろうか。

先に述べたように近代の「宗教学の祖」はメ
ソポタミア宗教をほとんど視野に入れなかつた
し、入れられなかった。ここでフレイザーがメ
ソポタミアの「祈祷呪文」文書を知っていたら
と考えてみても仕方のないことである。アッシ
リア学者でさえメソポタミアの「祈祷呪文」文
書の全貌についてようやく把握し始めたところ
なのである。

今後「メソポタミア宗教」を構想するため
には、メソポタミアの範囲を超える、ある程度
の「比較宗教学的」な視点が必要となると思われ
る。筆者としてはあらゆる宗教事象とのさまざ
まな比較が有益であると考えている。

現在のところ「古代ギリシャ宗教」、「古代ロ
ーマ宗教」、「古代エジプト宗教」などの語とほ
ぼ同様のものとして「古代メソポタミア宗教」
の語もそれほど抵抗感なく受け入れられるよう
である。しかし「古代メソポタミア宗教」に含め
られる多様性はおそらく他の「古代宗教」より
大きいと思われる。「古代メソポタミア」とい
われる文化圏は一般的におよそ紀元前3500年
頃から紀元前500年頃までのティグリス・ユー
フラテス両河流域に設定される。約三千年とい

う期間にわたって広大な地域を舞台とした古代メソポタミアにおいて文化的状況や宗教的状況が一様であり続けたはずはない。

当面はメソポタミア文化を構成する主要な四つの要素としてのシュメール、アッカド、バビロニア、アッシリアの「宗教」について検討するとともに、さらに小さい単位として諸都市（たとえばラルサ、バビロン、シッパル、アッシュル、アッシュルの商業拠点であった小アジアのカニシュなど）の「宗教」について地道な「素材」研究を積み重ねてゆくほかはないであろう。しかし同時に、他と比較可能な事象に注意しながら、個々の「複合性」を描いてゆくことが必要である。このような作業に筆者も取り組む所存であるが、宗教学に興味をもつアッシリア学者と、メソポタミア宗教に興味をもつ宗教学者が増えてゆき、新たな研究の地平が開かれることを期待したい。

注

- (1) 島蘭・鶴岡編2004；池上ほか編2003など参照。
- (2) ボテロ2001, p.iii.
- (3) 「メソポタミア文明」については松本編2000参照。
- (4) メソポタミアの絵文字の発生と楔形文字への発展については渡辺2000参照。
- (5) 渡辺2000参照。
- (6) 渡辺1998, pp.292-293参照。
- (7) 前川1998；前田1998参照。
- (8) 深澤2003, pp.45-46.
- (9) 関2003, p.5参照。
- (10) 池上ほか編2003-2004.
- (11) 島蘭2004, pp.11-12参照。
- (12) デイヴィズ1987参照。
- (13) ウォーカー1987参照。
- (14) Lundquist 1995, p.67参照。
- (15) 渡辺1998参照。
- (16) たとえばClaudius James Richは英国東インド会社の駐在員として1808年にバグダッドに赴任し、バビロンとその周辺を訪ねていくつかの報告文と地図を出版した (*Memoir on the Ruins of Babylon*, 1818; *Second Memoir on the Ruins of Babylon*, 1818など)。Lundquist 1995, pp.70-71参照。
- (17) 渡辺2000, pp.159-160参照。楔形文字解読の経緯についてはさらにウォーカー1987, pp.90-99参照。
- (18) Lundquist 1995, p.77参照。
- (19) ウーリー1986, pp.46-49参照。
- (20) Larsen 1995参照
- (21) この時期を含む研究史概観についてはMaier 1995; Lundquist 1995など参照。「＜神話と儀礼＞学派」についてはSegal (ed.) 1998参照。
- (22) Reiner 2003, p.116参照。
- (23) “Why a ‘Mesopotamian Religion’ should not be written,” Oppenheim 1977 (1964), pp.171-183参照。
- (24) Oppenheim 1977, p.175.
- (25) Jacobsen 1976.
- (26) とくに重要な業績としてはA. R. ジョージによる『ギルガメシュ叙事詩』の大規模な再編纂がある。George 2003参照。
- (27) 特にS. マウル、T. アブシュらの功績は大きい。Maul 1988; Maul 1994; Abusch 2002; Abusch/Vander Toorn (eds.) 1999; Thomsen 2001など参照。Thomsen 2001は「呪術」を中心としながらもある程度「メソポタミア宗教」について概括的な見取り図を示している。
- (28) Sasson (ed.) 1995, III, Part 8, pp.1685-2094参照。
- (29) Johnston (ed.) 2004. この書の「総論」部分だけはJohnston (ed.) 2007としても出版された。
- (30) たとえば『近東の神々と神話』(Haussig (ed.) 1983) では、メソポタミア、小アジア、シリア、エジプト、イスラム以前の北および中央アラビア、南アラビア、エチオピアなどの地域の神々と神話についてそれぞれの専門家が担当している。
- (31) 日本オリエント学会編 2004, p.iii.
- (32) 渡辺和子ほか2004b.
- (33) 「宗教A：メソポタミアにおける」(Zgoll 2007) と「宗教B：ヒッタイト人における」(Beckman 2007) の二項目に分かれている。Streck (ed.) 2007, pp.323-338.
- (34) Zgoll 2007, p.323参照。
- (35) Couliano 1991, p.50.
- (36) 「ヌミノーゼなもの」はオットー2006の訳語による。
- (37) 前田徹はこのジェイコブセン説にほぼ従ってシュメール宗教を説明する。前田2003, pp.158-159参照。

- (38) 特にオットーの学説の再考を含めた藤原の論考は重要である。藤原2005参照。
- (39) 後藤光一郎の業績は後藤1993にまとめられている。さらに渡辺1992, pp.178-179参照。後藤の薫陶を受けた月本昭男はドイツに留学して博士論文『古代メソポタミアの「死者供養」』(Tsukimoto 1985) を、同様に筆者も博士論文『エサルハドンによる王位継承の定めを遵守するアデー誓約』(Watanabe 1987) を出版したが、これらは宗教学とアッシリア学が重なる領域での最初の研究でもある。
- (40) Mayer 1976参照。フォン・ゾーデンによれば、“Gebetsbeschw_rung” という名称はその師であるB. ランツベルガー (Benno Landsberger) に遡る。von Soden 1957-1971参照。
- (41) 月本1992, p.188参照。
- (42) フレイザー1951, p.126.
- (43) von Soden 1965-1981.
- (44) CAD
- (45) 次の二点の原文書が知られている。テキストA: LKA 112 (VAT 13604; ass.); テキストB: 83-1-18, 447 (bab.). Maul 1994, pp.332-335; 渡辺1992, pp.186-189参照。

参考文献

- 池上良正・小田淑子・島蘭進・末本文美士・関一敏・鶴岡賀雄編2003-2004: 『岩波講座宗教』第1-10巻、岩波書店。
- L. ウーリー/P. R. S. モーレー1986: 『カルデア人のウル』(森岡妙子訳) みすず書房 (原著: Sir Leonard Wooley/P.R.S. Moorey, *Ur 'of the Chaldees'*, London 1982; Revised edition of: Sir Leonard Wooley, *Excavations at Ur. A Record of Twelve Years' Work*, London 1954)。
- クリストファー・ウォーカー1987: 『楔形文字』(大城光正訳) 学芸書林。
- 大貫良夫・前川和也・渡辺和子・屋形禎亮1998: 『世界の歴史1 人類の起原と古代オリエント』中央公論新社。
- ルドルフ・オットー2006: 『聖なるもの』(華園曉磨訳) 創元社 (原著: Rudolf Otto, *Das Heilige*, 1917)。
- ハンス・G. キッペンベルク2005: 『宗教史の発見—宗教学と近代』(月本昭男・渡辺学・久保田浩訳) 岩波書店 (原著: Hans G. Kippenberg, *Die Entdeckung der Religionsgeschichte: Religions-*

- wissenschaft und Moderne*, München 1997)。
- 後藤光一郎1993: 『宗教と風土—古代オリエントの場合』リトン。
- 島蘭 進・鶴岡賀雄編2004: 『<宗教>再考』ペリカン社。
- 島蘭 進2004: 「『宗教史の可能性』序論」池上ほか編2003-2004、第3巻、pp.1-26.
- 関 一敏2003: 「<宗教とはなにか>序論」池上ほか編2003-2004、第1巻、pp.1-20.
- 月本昭男1992: 「呪と医と信—古代メソポタミアの場合—」脇本・柳川編1992, 第3巻pp.171-203.
- ヴィヴィアン・デイヴィズ1987: 『エジプト聖刻文字』(塚本明廣訳) 学芸書林。
- 日本オリエント学会編2004: 『古代オリエント事典』岩波書店。
- 深澤英隆2003: 「『宗教』の生誕—近代宗教概念の生成と呪縛—」池上ほか編2003-2004、第1巻、pp.23-54.
- 藤原聖子2005: 『「聖」概念と近代—批判的比較宗教学に向けて—』大正大学出版会。
- J. G. フレイザー2003『初版 金枝篇』上下 (吉川信訳)、ちくま学芸文庫、筑摩書房 (原著: Sir James G. Frazer, *The Golden Bough*, 1st ed., 2 vols., 1890)。
- J. G. フレイザー1951: 『金枝篇』(永橋卓介訳) 岩波書店 (原著: Sir James G. Frazer, *The Golden Bough*. Abridged edition, 1922; Dover publications 2002)。
- ジャン・ボテロ2001: 『最古の宗教—古代メソポタミア』(松島英子訳) 法政大学出版局 (原著: Jean Bottéro, *La plus vieille religion en Mésopotamie*, Paris 1998)。
- 前川和也ほか1998: 『岩波講座世界歴史2 オリエント世界 —7世紀』岩波書店。
- 前田 徹2003: 『メソポタミアの王・神・世界観—シュメール人の王権観』山川出版社。
- 松本健編2000: 『四大文明 メソポタミア』日本放送出版協会。
- 脇本平也・柳川啓一編1992: 『現代宗教学』第1-4巻、東京大学出版会。
- 渡辺和子1992: 「古代メソポタミア宗教と宗教民俗学」『宗教研究』292, pp.175-194.
- 渡辺和子1998: 「アッシリアの自己同一性と異文化理解」前川ほか1998, pp.271-300.
- 渡辺和子2000: 「メソポタミアの文字の歴史」松本編2000, pp.146-171.
- 渡辺和子ほか2004b: 「総論VI. 宗教と科学」日本オ

- リエント学会編2004, pp.104-126.
- Abusch, Tzvi/Van der Toorn, K. (eds.) 1999: *Mesopotamian Magic, Ancient Magic and Divination*, Ancient Magic and Divination I, Groningen.
- Abusch, Tzvi 2002: *Mesopotamian Witchcraft: toward a History and Understanding of Babylonian Witchcraft Beliefs and Literature*, Ancient Magic and Divination V, Leiden.
- Ankarloo, Bengt/Clark, Stuart (eds.) 2001: *Witchcraft and Magic in Europe. Biblical and Pagan Societies*, Philadelphia.
- Assmann, Jan 2004: "Monotheism and Polytheism," Johnston (ed.) 2004, pp.17-31.
- Attridge, Harold W. 2004: "Pollution, Sin, Atonement, Salvation," Johnston (ed.) 2004, pp.71-83.
- Beckman, G. 2007: "Religion. B. Bei den Hethitern," Streck (ed.) 2007, pp.333-338.
- Bottéro, Jean 1988: "Magie. A. In Mesopotamien," *Reallexikon der Assyriologie* VII/3-4, Berlin, pp.200-234.
- CAD 1956- : *The Assyrian Dictionary*, The Oriental Institute, Chicago.
- Collins, John J. 2004: "Cosmology," Johnston (ed.) 2004, pp.59-70.
- Couliano, I. P. 1991: *Out of this World. Otherworldly Journeys from Gilgamesh to Albert Einstein*, Boston.
- Edzard, D. O. 2003: *Reallexikon der Assyriologie* 10, 1./2., Berlin.
- Falkenstein, A. 1957-1971: "Gebet I," Weidner/von Soden (eds.) 1957-1971, pp.156-160.
- Farber, Walter 1995: "Witchcraft, Magic, and Divination in Ancient Mesopotamia," Sasson (ed.) 1995, pp.1895-1909.
- Frahm, E. 2006: "Prophetie," Streck (ed.) 2006, pp.7-11.
- George, A. R. 2003: *The Babylonian Gilgamesh Epic* I-II, Oxford.
- Graf, Fritz 2004: "Myth," Johnston (ed.) 2004, pp.45-58.
- Green, Anthony 1995: "Ancient Mesopotamian Religious Iconography," Sasson (ed.) 1995, pp.1837-1855.
- Hallo, William W. 1995: "Lamentations and Prayers in Sumer and Akkad," Sasson (ed.) 1995, pp. 1871-1893.
- Haussig, Hans Wilhelm (eds.) 1983: *Götter und Mythen im Vordern Orient*, Zweite Auflage, Stuttgart.
- Jacobsen, Thorkild 1976: *The Treasures of Darkness. A History of Mesopotamian Religion*, New Haven.
- Johnston, Sarah Iles (ed.) 2004: *Religions of the Ancient World*, Cambridge, Massachusetts.
- Johnston, Sarah Iles 2004: "Mysteries," Johnston (ed.) 2004, pp.98-111.
- Johnston, Sarah Iles 2004: "Magic," Johnston (ed.) 2004, pp.139-152.
- Johnston, Sarah Iles (ed.) 2007: *Ancient Religions*, Cambridge, Massachusetts.
- Lambert, W. G. 1955: "Myth and Mythmaking in Sumer and Akkad," Sasson (ed.) 1995, pp.1825-1835.
- Larsen, M. T. 1995: "The 'Babel/Bible' Controversy and Its Aftermath," Sasson (ed.) 1995, I, pp. 95-106.
- LKA: Erich Ebeling/ Franz Köcher, *Literarische Keilschrifttexte aus Assur*, Berlin 1953.
- Lundquist, J. M. 1995: "Babylon in European Thought," Sasson (ed.) 1995, I, pp.67-80.
- Maeda, Tohru/Watanabe, Kazuko 2001: "Assyriology. Part I: It All Started with Fifty Sumerian Tablets, Part II: Contributions of the Younger Generation," *Orient* 36, pp.35-56.
- Maier, J. 1995: "The Ancient Near East in Modern Thought," Sasson (ed.) 1995, I, pp.107-120.
- Maul, Stefan M. 1988: *'Herzberuhigungsklagen.'* *Die sumerisch-akkadischen Eršahunga-Gebete*, Wiesbaden.
- Maul, Stefan M. 1994: *Zukunftsbewältigung. Eine Untersuchung altorientalischen Denkens anhand der babylonisch-assyrischen Löserituale (Namburbi)*, Mainz am Rhein.
- Maul, Stefan M. 1999: "How the Babylonians Protected Themselves against Calamities Announced by Omens," Abusch/Van der Toorn (eds.) 1999, pp.123-129.
- Maul, Stefan M. 2003: "Omina und Orakel," Edzard (ed.) 2003, pp.45-88.
- Mayer, W. 1976: *Untersuchungen zur Formensprache der babylonischen "Gebetsbeschwörungen"*, Rome.
- Meier, Gerhard 1937: *Die assyrische Beschwörungssammlung Maqlû*, Archiv für Orientforschung Beiheft 2, Berlin.

- Oppenheim, A. Leo 1977: *Ancient Mesopotamia. Portrait of a Dead Civilization*, Revised by Erica Reiner, Chicago (First edition 1964).
- Reiner, Erica 2003: "Oppenheim," Edzard (ed.) 2003, p.116.
- Sallaberger, W. 2007: "Ritual. A. In Mesopotamien," Streck (ed.) 2007, pp.421-430.
- Sasson, J. M. (ed.) 1995: *Civilizations of the Ancient Near East*, I-IV, Michigan.
- Scheid, John 2004: "Religions in Contact," Johnston (ed.) 2004, pp.112-126.
- Scurlock Jo Ann 1995: "Death and the Afterlife in Ancient Mesopotamian Thought," Sasson (ed.) 1995, pp.1883-1893.
- Segal, Robert A. (ed.) 1998: *The Myth and Ritual Theory. An Anthology*, Malden Massachusetts.
- von Soden, Wolfram 1957-1971: "Gebet II," Weidner/von Soden (eds.) 1957-1971, pp.160-170.
- von Soden, Wolfram 1965-1981: *Akkadisches Handwörterbuch* (= *AHw*) I-III, Wiesbaden.
- Streck, M. P. (ed.) 2006: *Reallexikon der Assyriologie* 10, 1./2., Berlin.
- Streck, M. P. (ed.) 2007: *Reallexikon der Assyriologie* 11, 3./4.—5./6., Berlin.
- Thomsen, Marie-Louise 2001: "Witchcraft and Magic in Ancient Mesopotamia," Ankarloo/Clark (eds.) 2001, pp.1-95.
- Tsukimoto, Akio 1985: *Untersuchungen zur Totenpflege (kispum) im alten Mesopotamien*, AOAT, 216, Neukirchen-Vluyn.
- Van Binsbergen, Wim/Wiggermann, Frans 1999: "Magic in History. A Theoretical Perspective, and Its Application to Ancient Mesopotamia," Abusch/Van der Toorn (eds.) 1999, pp.1-34.
- Watanabe, Kazuko 1987: *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*, Berlin.
- Weidner, Ernst/von Soden 1957-1971: Wolfram (eds.), *Reallexikon der Assyriologie* III, Berlin.
- Wilcke, Claus (ed.) 2007: *Das geistige Erfassen der Welt im Alten Orient. Sprache, Religion, Kultur und Gesellschaft*, Wiesbaden.
- Wiggermann, F. A. M. 1995: "Theologies, Priests, and Worship in Ancient Mesopotamia," Sasson (ed.) 1995, pp.1857-1870.
- Zgoll, A. 2007: "Religion. A," Streck (ed.) 2007, pp.323-333.